

百聞は一見に如かず

マタイ15:21~28 / 李正雨師

今日の説教題は「百聞は一見に如かず」です。皆様もよくご存知のように、ものごとの実際は、耳で聞くよりも、目で見ることがはるかによく分かるという意味です。先週の福音書には、ガリラヤ湖で起きた風と波によって悩まされている弟子たちが描かれました。ところで、ガリラヤ湖は文字通り海ではなく湖です。湖で風と波によって悩まされたということは、正直に理解しにくいです。それで、私は聴衆の方々の理解を助けるためにガリラヤ湖の写真をお見せしました。今、皆様をご覧になっている写真です。この写真を通して、私たちはガリラヤ湖が非常に大きいということが分かります。そして、こんなに大きな湖の周りには、高低の山が湖を囲んでいるということも分かります。この山から冷たい風が吹いて、暖かい湖の空気とぶつかり、湖ですが、このように波が起きるそうです。いかがでしょうか。写真で見ると、確かに分かりになるでしょう。百回聞くよりも一回見るほうがましだと思います。

今日の福音書もこれと関係があると思います。今日の福音書で、私たちは見慣れないイエス様と出会うこととなります。私たちが知っているイエス様は、愛に満ちて、憐れみ深いイエス様ですよね。もちろん時によっては、弟子たちをお叱りになったり、ファリサイ派の人々や律法学者たちと議論されたりなさいます。しかし、弱者、病人、イエス様の助けを必要とする人々には、常に暖かく接してくださいました。ところが、今日の福音書のイエス様は、とても冷たいです。イエス様は、ご自分の助けを求める者の要求に応えません。イエス様の助けを求めた者も、社会的な弱者でした。自分の娘を救うために、何度もイエス様に願いましたが、イエス様は冷たく断ります。このようなイエス様の姿は、私たちにとって慣れていません。なぜイエス様は、ご自分の助けを求める者に冷たく接したのでしょうか。イエス様の言葉通りに、彼女がイスラエルの人ではなかったからでしょうか。これを調べるために、今日の福音書21節を見てみましょう。「イエスはそこをたち、ティルスとシドンの地方に行かれた。」

今日の福音書は、「イエスはそこをたち」という言葉から始まります。ここで「そこ」は、ゲネサレトという町でガリラヤの地域です。画面の地図を御覧ください。イエス様は、このゲネサレトでファリサイ派の人々と律法学者たちと議論されます。議論のテーマは、昔の人の言い伝え、伝統を守ることでした。議論を通して、イエス様は無条件で伝統を守るのには、正しくないと言われます。そして伝統より重要なことは、神様の戒めであるということをお弟子たちに教えてくださいました。それを教えられた後、イエス様はゲネサレトを立ち去り、ティルスとシドンの地域に行かれます。ティルスとシドン、そこはイスラエルではなくフェニキア、すなわち異邦の地域でした。

異邦の地域で異邦人に会うのは、当然なことです。皆様が韓国に行くと、韓国人に会うように、フェニキアに行かれたイエス様は、フェニキアの人に会うしかないでしょう。それで、今日の福音書では、フェニキアの人が登場します。ところが、今日の福音書では、フェニキアではなくカナンの女と書いてあります。フェニキアは過去のカナンだったからです。皆様、カナンという言葉、説教の中でたくさん聞いたことがあると思います。創世記によると、カナンの土地は神様がアブラハムに与えられることにされた土地です。そしてこの約束は、出エジプト記のモーセに再び繰り返されます。それでモーセは、出エジプトの民を率いてカナンの土地に行き、民数記の記録のようにイスラエルの民は、カナンを征服します。つまり、聖書の中でカナンの人という意味は、ユダヤ人に占領されたパレスチナの人又は異教徒という意味を持っています。イスラエルに征服された国、異邦の神に仕える人、それも女一人がイエス様のところに来て助けを求めます。22節の言葉です。「すると、この地に生まれたカナンの女が出て来て、『主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています』と叫んだ。」

しかし、この女の叫びにもかかわらず、イエス様は一言も答えられません。すると、弟子たちがイエス様のところに来てこう言います。「この女を追い払ってください。叫びながらついて来ますので(23節)。」弟子たちにとって、カナンの女は重要な人物ではなかったでしょう。自分たちが征服した国、自分たちと違う

神を信じる人、しかも女性です。ローマの人、ギリシャ式の教育を受けた人であっても、ユダヤ人の差別を避けることはできませんでした。ユダヤ人たちは、自分だけが神様に選ばれた民、清い人だと思ったからです。それで彼らは、昔の人の言い伝え、伝統に従って手を洗うこと、清めの儀式を大切に思いました。選ばれた人は、清めなければならないと思ったのです。そして、この清めの儀式はますます強化され、あらゆる状況によって手を洗います。出かける後に帰ったら手を洗い、食事をする前にも手を洗いました。汚れたものと間接的な接触があるかもしれないという恐れのためでした。もちろん律法には、このように細かいことまで決められていませんでした。それにもかかわらず、当時のユダヤ人たちは、この清めの儀式を大切に思い、このことによってイエス様とファリサイ派の人々、律法学者たちが議論したのです。そして弟子たちも、このような習慣に染まっていたので、イエス様に従いながら叫ぶ異邦の女を追い払ってくださいと求めたのだと思います。

この求めを聞かれたイエス様は、女にこう言われます。24節と26節の言葉です。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない。」「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけません。」皆様、この言葉がどう感じられますか。あんまりひどいと感じられませんか。しかし、イエス様がこう言われたのは、これがユダヤ人の大切な清めの意識、選民思想だったからだと思います。イエス様は、弟子たちの前でユダヤ人の清めの意識と選民意識がどれほど誤ったことかを見せておられるのです。助けを求める者を追い払うこと。血統と信仰の問題で差別すること。果たしてこれが神様のお望みであり、律法が教えていることでしょうか。そうではないでしょう。

「お前は俺のようなクリスチャンではないから」、「お前は俺と同じ民族ではないから」、「お前の国は俺の国より貧しくて、俺たちに占領されたから」。このような理由によって差別して助けられないならば、これが昔の人の言い伝えと思い、守ろうとするなら、これは確かに間違っていることです。それでイエス様はこのような考えを持っている人々と議論され、これを弟子たちに教えられるため、議論の場から離れ、ティルスとシドンの地方に行かれたと思います。そして、そこでユダヤ人の清めと選民意識の正体が何なのかを弟子たちに直接見せてくださいました。「百聞は一見に如かず」であるからです。

また、カナンの女の答えは、異邦の地域でも、立派な信仰があることを示すことでした。カナンの方は、イエス様の冷たい態度にも退きませんでした。確信を持って、自分の子供を癒すことをあきらめませんでした。彼女がイエス様のことを信頼したからそうしたのか、それとも、この方法しかなかったから、そうしたのはよく分かりません。しかし、イエス様は彼女の信仰の形を問題にしませんでした。彼女の信仰、退くことなく求める姿を見てくださいました。そしてこの女の信仰は立派だと言われます。28節の言葉です。「そこで、イエスはお答えになった。『婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように。』そのとき、娘の病気はいやされた。」

おそらくこれを見た弟子たちは、多くのことを感じられたでしょう。弟子たちの中でだれもこのようなお褒めの言葉を聞かなかったからです。先週の福音書で、ペトロはイエス様に「信仰の薄い者よ。なぜ疑ったのか」と言われました。しかし、イスラエルに征服された国、異邦の神に仕える人、それも女が「あなたの信仰は立派だ」と言われました。そしてそのとき、彼女の子供は癒されました。信仰とは何でしょうか。私たちは、自分の信仰生活の中で何を求めるべきでしょうか。今日の福音書は、これを私たちに示しているようです。信仰の目的は、清くなることにあるわけではありません。神様に選ばれること、自分の救いだけが目的になってはいけません。皆がイエス様の助けを受けること、イエス様の教えに従って皆を神様の子として同等に思うこと、そして、御心がこの世にも行われるように祈ること。これが私たちの信仰の目的と理由になるべきでしょう。この驚くべきイエス様の教えが私たちを導いてくださいますように。今も戦争と独裁などによって悩まされているすべての人に、イエス様の救いが臨みますように、主の御名によって祈ります。アーメン